

□ オーケストラ

岩野 裕一

2020年に新型コロナウィルスの世界的な流行が始まって以来、わが国のオーケストラは前例のない対応に追われてきたが、2023年5月に政府が感染法上の分類を「5類」へ引き下げたことで、ほぼ従来の演奏活動に戻ることができた。出入国制限が解除されて海外勢の来日ラッシュを迎える一方で、10月には関西フィルハーモニー管弦楽団が欧洲公演、日本センチュリー交響楽団がマカオ公演を行うなど、国際交流も再開しつつある。

2023年は、九州交響楽団が創立70周年、広島交響楽団が60周年、仙台フィルハーモニー管弦楽団が50周年を迎えた。また、わが国交響楽界の大恩人である近衛秀磨（1898–1973）の没後50年になんて、センチュリー響が秋山和慶指揮の4月定期で近衛版「英雄」、パシフィック・フィルハーモニア東京（PPT）が10月定期で飯森範親指揮の近衛版「展覧会の絵」ほかを蘇演したのも、歴史を踏まえた好企画だった。

各地の楽団が、それぞれ関係の深い指揮者と演奏会形式のオペラ公演で注目すべき成果を上げたのも、2023年の特長だった。

東京交響楽団は音楽監督ジョナサン・ノットとR・シュトラウスの「エレクトラ」（5月）を、東京フィルハーモニー交響楽団は名譽音楽監督のチョン・ミョンファンとヴェルディの「オテロ」（7月）を上演。いずれも世界的な水準の圧倒的な名演となった。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団音楽監督の沼尻竜典は、R・シュトラウスの「サロメ」を、6月の同団を皮切りに、7月に京都市交響楽団と九響の定期公演で指揮した。主要な歌手陣を同一とすることで音楽的にも経済的にもプラスとなるこの方式は、今後のモデルとなろう。山形交響楽団は、海外の歌劇場経験も豊富な常任指揮者の阪哲朗とシリーズをスタート、ブッチャーニの「ラ・ボエーム」（2月）を取り上げたほか、阪が指揮する全国3ホールの共同制作「こうもり」でもピットに入った。

大阪交響楽団は、柴田真郁がミュージック・アドバイザー就任披露でドヴォルザーク「ルサルカ」を取り上げ、自らキャステイングした歌手陣の健闘もあって大成功を収めた（2月）。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の常任指揮者、高闘健が満を持して臨んだブッチャーニ「トスカ」も高い評価を得ている（11月）。

指揮者の動静としては、4月に京都市交響楽団の第14代常任指揮者に沖澤のどかが就任、社会的にも注目された。同じ4月には、新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督に佐渡裕、名古屋フィルハーモニー交響楽団の音楽監督に川瀬賢太郎、群馬交響楽団の常任指揮者に飯森範親、仙台フィルの常任指揮者に高闘健と指揮者に太田弦が就いた。9月には日本フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者にカーチュン・ウォンが迎えられている。

一方、7月には外山雄三（享年92）、8月には飯守泰次郎（享年82）という、二人の重鎮が相次いで世を去った。外山は5月にPPTの定期公演を指揮、シユーベルトの「グレイト」終楽章で退場するアクシデントがあったが、畢生の演奏を聴かせた。飯守も4月には東京シティ・フィルとブルックナーの「8番」、「4番」、関西フィルとブームスの「2番」を指揮、旺盛な活動中だっただけに惜しまれる。

在京楽団の注目すべき公演として、NHK交響楽団と首席指揮者ファビオ・ルイージは、12月の第2000回定期演奏会をファン投

票で選ばれたマーラー「千人の交響曲」で祝った。新日本フィルは2024年末での引退を表明している井上道義が作曲した自伝的オペラ「降福からの道」を、自身の指揮と演出で上演、大きな感動を呼んだ（1月）。

東京都交響楽団は、音楽監督大野和士とヴァイオリニストのパトリシア・コパチンスカヤが鮮烈なパフォーマンスを披露したりゲティ生誕100年記念の3月定期、満員の聴衆を集めた山田和樹渾身の三善見「反戦三部作」（5月）が出色だった。日本フィルはピエタリ・インキンネンが首席指揮者として最後の定期公演で、フィンランドからソリストと男声合唱団を招きシベリウスの「ケレルヴォ交響曲」を取り上げた（4月）。

PPTは鈴木秀美とのメンデルスゾーンとシューマン（10月）や、眞の実力者ながら久しくプロ楽団の指揮台から遠ざかっていた名匠・汐澤安彦の奇跡的な名演（11月）で気を吐いた。読売日本交響楽団は、常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが、ハンス・アイスラーの問題作「ドイツ交響曲」を日本初演（10月）したほか、9月定期に登場したスイスの指揮者インゴ・メッツマッハーのブルックナー「4番」もユニークな好演。

地方都市に目を向けると、札幌交響楽団は今年度で任期満了を迎える常任のマティアス・バーメルトが、コロナ禍で2度延期したブームスの「ドイツ・レクイエム」で宿願を果たした（5月）。山響は、90歳を迎えた創立名誉指揮者、村川千秋が特別演奏会でシベリウスの「3番」を精魂込めて指揮（1月）。仙台フィルは1月定期のマキシム・パスカル、飯守泰次郎と最後の共演となった3月定期のブルックナー「7番」が印象に残る。

群響は、10月定期および東京公演における井上道義とのショスタコーヴィチ「4番」が壮絶な演奏。なお井上は、名古屋フィルの5月定期でクセナキス「ノモス・ガンマ」を演奏する際、スコア通り円形にオーケストラを配置、ラヴェル「ボレロ」もそのまま演奏して聴衆の度肝を抜いた。千葉交響楽団は山下一史音楽監督と「アジア・オーケストラ・ウイーク」に初登場（10月）。富士山静岡交響楽団は、9月定期に初客演したユベール・スダーンが「英雄」で楽団の潜在能力を開花させている。

オーケストラ・アンサンブル金沢は、シーズンを通してベートーヴェンの交響曲をさまざまな指揮者と系統的に取り上げた。セントラル愛知交響楽団は、常任指揮者角田鋼亮との「ハイドンのロンドン精神」シリーズが秀逸（12月）。中部フィルハーモニー交響楽団は、芸術監督秋山和慶と2年越しのシベリウス全交響曲チクリスをスタートさせた（5, 7, 10月）。愛知室内オーケストラは、ドルトムント市立歌劇場音楽総監督代理の小林資典が、新ウイーン楽派や古典で快演を聴かせている（7月）。

大阪フィルは、音楽監督尾高忠明とのメンデルスゾーン・チクリスを挙行、アンサンブルに磨きをかけた（6, 8, 11月）。兵庫芸術文化センター管弦楽団は、音楽監督佐渡裕とのマーラー「7番」（1月）など安定した活動ぶり。神戸市室内管弦楽団は鈴木秀美音楽監督が神戸市混声合唱団とのハイドン「天地創造」で輝かしい成果を挙げた（12月）。

広響は音楽総監督の最終年度を迎えた下野竜也が、恒例の「ディスクバリー・シリーズ」で邦人作曲家とハイドンの交響曲を組み合わせた（6, 9, 11月）。九響はロシアの名匠ヴァレリー・ボリヤンスキーが「シェエラザード」（2月）とラフマニノフ「2番」（11月）で聴衆を唸らせた。

恒例の「セイジ・オザワ松本フェスティバル」では、30年ぶりに来日した映画音楽の世界的な巨匠ジョン・ウイリアムズがサイトウ・キネン・オーケストラの指揮台に立ち、圧倒的な存在感で満場を沸かせた。舞台上で小澤征爾総監督と固い抱擁を交わしたのは、歴史に残るシーンであった（9月）。